

# 学生による翻訳サイトの利用実態と問題点

大須賀直子・真野千佳子

## The Negative Effects of Using Translation Sites on College Students' Language Learning

Naoko OSUKA, Chikako MANO

### Abstract

As computerization continues to expand dramatically in society, it is also affecting the way we learn and teach English. While there are many benefits of using computers in the EFL classroom, there seem to be some problems cropping up that should not be overlooked. This paper focuses on one of them: students' use of translation sites on the Internet. When we input Japanese sentences into machine translation (MT) systems without considering structural differences between Japanese and English, they often output nonsensical English translation. Nevertheless, a lot of students tend to use them for their English writing assignments. If students depend on MT systems excessively, and don't try to learn to think and write by themselves, their progress in English will be hindered.

This paper analyzes how college students use translation sites on the Internet, based on a survey of 279 students in June 2002. Then the efficacy of using the sites for writing in English is examined, and finally a classroom activity designed to encourage students to avoid depending on MT systems is introduced.

### 1. はじめに

コンピュータ化の波は英語教育現場にも大きく押し寄せ、各大学でも多くのコンピュータを設置し、コンピュータを使った英語授業、いわゆる CALL を導入する大学も急速に増えているようである。JACET (大学英語教育学会) が2000年に行なった大学英語教育実態調査によると、回答した大学のうち71.1%が「英語教育に使えるコンピュータ室がある」と答えている。大学生個人を見ても、筆者らが2002年7月に約300人を対象に行なったアンケートでは、約8割近くの学生が「自分で使えるコンピュータが自宅にある」と答えた。

このようにコンピュータが身近になり、インターネットで世界中どこにでも瞬時につながるようになったことは、英語教育の可能性を大きく広げつつあることは確かなのだが、一方で見過ごせない問題も出てきている。そのひとつが学生による安易な無料翻訳サイトの利用である。日本語で書いた文をそのまま無料翻訳サイトにかけると、間違いだらけの、往々にして意味不明な独特の英文が出力されるが (添付資料参照)、ここ数年学生の書く英作文にそのような英文が目立つようになってきた。

機械翻訳自体は、国際コミュニケーションを容易にしてくれるツールとして今後の発展が大いに期待されるべきものである。しかし、現時点では、まだそのシステムは発展途上段階にあり、特に日英翻訳に関しては機械翻訳の第一人者と目される成田一（2000）も認めるようにその品質はかなり低いレベルである。筆者らが検証を行なったところでも、無料の日英翻訳サイトはどれも誤翻訳が多く実用に資するとは思えなかった。

また、CALLをはじめとするメディアを使っでの英語教育の目的を考えても、学生の安易な翻訳サイト利用には問題がある。町田他（2001）が述べているように、その目的は「英語を媒体にした情報を判断・選択・整理し、新たな情報を創造し伝達する」主体的な能力を育成することであると考えられるが、この場合、逆に機械に依存するような学習態度を生み出しているとも言えよう。そもそも、英語力の充分でない学生が自分で考えようとせずにこのようなサイトに頼ることは、学生の英語力向上という観点からしても、弊害の方が大きいと危惧される。Swain & Lapkin（1995）が主張しているように、英語力習得には自分で英文を組み立てるという統語プロセスを積み重ねることが重要だからである。

以上を踏まえ、本稿では、アンケート調査の結果に基づいて学生による翻訳サイトの利用実態を明らかにするとともに、翻訳サイト利用の有効性を検証し、さらに学生による安易な利用を防ぐための具体的なアクティビティを紹介することとしたい。

## 2. 学生による翻訳サイトの利用実態

### 1) 調査の概要

学生が実際にどのように翻訳サイトを利用しているのかを調べるために、2002年6月に本学国際学部他計4つの大学において、279名の大学生を対象に筆者らがそれぞれの担当授業内でアンケート調査を実施した。質問紙は選択式の8問と記述式の1問の計9問から成っていた。

### 2) 翻訳サイトの認知度および情報経路

「コンピュータに翻訳サイトがあることを知っていますか。」という質問に「はい」と答えた学生は279人中177人で、全体の63%であった。さらに表1に示すように、CALLが必修の大学、情報が必修の大学、情報が選択の大学の3種類に分類して見ると、CALL必修の大学では81%、情報必修の大学では69%、情報選択の大学では44%の認知度であった。

表1 翻訳サイトを知っている学生の割合

CALL必修の大学	77人 / 95人	(81%)
情報必修の大学	49人 / 69人	(69%)
情報選択の大学	51人 / 115人	(44%)

さらに「翻訳サイトがあることをどうやって知りましたか。」という質問（この質問のみ記述式）に対しては有効回答が149あったが、そのうち「友人から聞いた」と答えた学生が72人と一番多く、次いで「先生から教えてもらった」が34人、「自分で見つけた」と答えた学生が29人であった（表2参照）。

表2 どうやって翻訳サイトの存在を知ったか

友人から	72人
先生から	34人
自分で	29人
家族から	5人
その他	9人

(有効回答数：149)

### 3) 翻訳サイトの利用経験

「翻訳サイトを利用したことがありますか。」という質問に「はい」と答えた学生は279人中98人で、全体の35%であった。これも1)と同様に3種類の大学別に分類してみると、表3に示すように、CALL必修、情報必修、情報選択の順に利用経験のある学生が多い。CALL必修の大学では半数以上の学生が翻訳サイトを利用した経験があることがわかった。

表3 翻訳サイトを利用したことがある学生の割合

CALL必修の大学	52人 / 95人	(54%)
情報必修の大学	28人 / 69人	(39%)
情報選択の大学	18人 / 115人	(16%)

### 4) 翻訳サイトの利用理由および利用方法

「翻訳サイトのどの機能を利用しましたか。」という質問には、利用経験のある学生98人のうち、56人が「英文和訳と和文英訳の両方」と答え、「英文和訳」と答えた学生は15人、「和文英訳」と答えた学生は30人であった。この結果から英文和訳と和文英訳の両方を使った学生が最も多いことがわかった。筆者らのCALL授業担当経験からすると、英文和訳に関しては、インターネットで検索した英文資料などを翻訳サイトにかけて和訳させ、手取り早く理解するために利用しているようである。翻訳サイトを英文和訳で利用することにも問題があると思われるが、本調査では和文英訳に関する利用について焦点を絞ったため、以下の質問はすべて和文英訳についてである。

「なぜ翻訳サイトを利用したのですか。」という質問には、「英語でどう表現していいかわからない時部分的に参考になるから」と答えた学生が98人中61人と圧倒的に多く、次いで「自分で英作文するより短時間でできるから」が30人で、その他の回答は以下ようになった(表4参照)。学生の多くが「部分的に」参考にしたいという理由で翻訳サイトを利用していることがわかった。

表4 翻訳サイトを利用した理由

英語でどう表現していいかわからない時部分的に参考になるから	61人
自分で英作文するより短時間でできるから	30人
英作文は苦手なので考えるのが面倒だからつい使ってしまう	11人
ハイテクの時代に便利な機能を利用しない手はない	10人
締め切りに遅れるよりは、形式さえ整っていれば問題ないと思うから	5人
教師に翻訳サイトを使ったことがわからないだろうと思ったから	2人
その他	12人

(複数回答あり)

この傾向は、次の「どのような使い方をしましたか。」という質問に対する回答でも裏づけられた。表5に示すように「自力で書ける部分は自分で書き、難しい部分のみ文単位でサイトを利用した」が45人、「辞書代わりに単語や語句のみをサイトにかけた」が26人、「日本語で全文を書いてからそのままサイトにかけた」が21人、「本などから引用した文をそのままサイトにかけた」は少数であった。文単位、単語・語句単位など翻訳サイトを「部分的に」利用した学生の方が、全文をサイトにかけた学生より多いことが明らかになった。

表5 翻訳サイトの利用方法

自力で書ける部分は自分で書き、難しい部分のみ文単位でサイトを利用した	45人
辞書代わりに単語や語句のみをサイトにかけた	26人
日本語で全文を書いてからそのままサイトにかけた	21人
本などから引用した文をそのままサイトにかけた	5人

(複数回答あり)

### 5) 翻訳サイトの英文の精度に対する認識および出力後の修正

表6は「日本語で書いた文を翻訳サイトにかけて出てきた英語の文を正しいと思えましたか。」という質問に対する回答を示している。「あまり正しくない」と答えた学生が53人で一番多く、次いで「間違いだらけである」が22人、一方「ほぼ正しい」は6人、「完璧である」は0人であった。確かに以前と比べて、全文を翻訳サイトにかけたとしか思えない英文の課題を提出してくる学生が減ってきていることを考えると、翻訳サイトというツールの情報とともに、「翻訳サイトの英文には間違いが多い」という情報も学生の間で伝わっているのかもしれない。

表6 翻訳サイトの英文の精度に対する認識

完璧である	0人
ほぼ正しい	6人
あまり正しくない	53人
間違いだらけである	22人
わからない	6人

(有効回答数：87)

さらに「翻訳サイトにかけて出てきた英文を直しましたか。」という質問には、39人が「少し直した」、38人が「たくさん直した」と回答し、「全く直さなかった」と答えた学生は13人であった（表7参照）。学生の多くが「翻訳サイトの英文には間違いが多い」という認識を持って利用しているとすれば当然の結果かもしれない。ただし、本当に直すことができているのかどうかは不明である。

表7 出力英文の修正

少し直した	39人
たくさん直した	38人
全く直さなかった	13人

(有効回答数：90)

最後に「これからも翻訳サイトを使おうと思いますか。」の質問には「はい」と答えた学生が61人、「いいえ」と答えた学生が35人で、利用経験のある学生のうち約3分の2が翻訳サイトに何らかのメリットを感じ今後も使おうと思っていることがわかった。

#### 6) 学生による翻訳サイト利用実態のまとめ

以上の調査の結果、CALLを必修としている大学では、翻訳サイトの認知度も利用経験の割合も非常に高いことが判明した。逆に、CALLも情報も必修でない大学では、翻訳サイトは今のところあまり利用されていないようである。また、多くの学生が、日本語の文を無料翻訳サイトにかけて出てきた英文に間違いが多いことをある程度認識していることも確認された。翻訳サイトが不完全であることを意識はしながらも、自分でどう表現していいかわからない時などに部分的に翻訳サイトにかけ、出てきた英文を自分なりに直す形で利用している実態が明らかになった。

### 3. 翻訳サイト利用の有効性

実態調査の結果では、筆者らが懸念していたほどには、学生たちは翻訳サイトに全面依存しているというわけではないようである。しかし、「間違いを認識している」、「部分的に直して使っている」と言っても、学生がどの程度翻訳サイトの不完全さを見抜けているのか、間違っている箇所を本当に正しく直せているのかは不明であった。そこで、翻訳サイトを利用して学生が書いた英語の文章を検討し、さらに本人が自力で書いた英語の文章と比較することにより、翻訳サイト利用の有効性を検証することとした。

#### 1) 検証方法

まず「私の夏休みの計画」という題名の日本語で書いた文章を用意した。この文章には、主語や述語の省略、日本語的表現、文と文のつながりの曖昧さなど、翻訳サイトにかけてると誤訳になりやすい要素を含ませておいた。次に、この文章をそのまま翻訳サイトにかけて英文を出力した。そして、この日本語文と翻訳サイトで出力された英文を組み合わせるワークシートを2種類作成した。すなわち、日本語文全文の他に、一方は前半部分のみ翻訳サイトで出力した英文を提示したものと、もう一方は後半部分のみ出力した英文を提示したものであった。

2002年6月に、筆者らが担当する3クラスにおいて、このワークシートを使って学生に作業を行な

わせた。この3クラスは、同年4月に実施したTOEICミニテストのクラス平均点によって、「上級」、「中級」、「初級」の英語力レベルに分類されていた。作業の内容は、各クラスの半数の学生には、日本語文の前半部分については翻訳サイトの英文を参考に、後半部分については自力で英訳させた。残りの半数の学生には、逆に前半は自力で、後半は翻訳サイトの英文を参考にして英訳させた。そして、自力で書いた英文と、翻訳サイトを参考にした英文とを比較して検証することとした。

## 2) 検証結果

学生が自力で書いた英文と、翻訳サイトを参考にして書いた英文を比較した結果、各レベルごとに次のような特徴が見られた。

### ① 初級レベルの学生 (対象者31人)

- ・ 翻訳サイトの英文の間違いを発見できない。
- ・ 翻訳サイトの英文の間違いに気づいても正しく直せない。
- ・ 翻訳サイトの英文に頼り、引きずられる傾向が非常に強い。
- ・ 自力で書いても間違った英文を書く。
- ・ 出来あがった英文の精度は、翻訳サイトを参考にしても、自力で書いても大差はないが、自力で書いた英文の方が言いたいことの推察ができる。

### ② 中級レベルの学生 (対象者22人)

- ・ ある程度間違いを発見して直す。
- ・ 翻訳サイトの英文に引きずられる傾向が所々で見られる。  
(例：日本語文の「私たちはいつも一緒にいました」が翻訳サイトでは“*We were always the same.*”と誤訳されているが、それをそのまま使用している学生が数人いた。また、「たくさん話したいと思います」は“*I want to make a lot of talk.*”と訳されているが、これについても数人の学生がそのまま使用していた。同様の間違いが他にも見られた。)
- ・ 出来あがった英文は、自力で書いた方が不自然さが少ない。

### ③ 上級レベルの学生 (対象者28人)

- ・ 最初から翻訳サイトの英文を参考にしない学生が多い。
- ・ 参考にした学生の中には、引きずられる傾向がやや見られる。  
(例：“*I entered to a college.*”や“*My hometown is the most relieved place.*”など翻訳サイトの微妙に誤った英文や不自然な表現をそのまま採用している学生が10人程度いた。)
- ・ 出来あがった英文は、自力で書いた方が自然で明快である。

## 3) 結論

以上の検証結果からわかったことは、翻訳サイトの英文は、単語単位などで参考になっている部分も少しはあるものの、全体としては学生がその誤りを見抜ききれているとは言えず、従って、適切に修正できていない、ということである。特に、初級レベルの学生に関しては、英文の間違いをほとんど見分けられないようであった。そして、翻訳サイトを使った箇所では、どのレベルにおいても、程度の差こそあれ誤りや不自然さに引きずられる傾向が多く見られた。また、出来あがった英文は、レベルにかかわらず、自力で書いた方が自然で間違いも少ないと判断された。このようなことから、

無料翻訳サイト利用の有効性は全くないと言わないまでも、かなり低く、むしろ学生の英語学習という側面から見た場合には弊害の方がはるかに大きいと結論づけられた。

#### 4. 翻訳サイトの安易な利用を防ぐための方策とアクティビティ

教師としては、この問題を深く認識した上で、早急に何らかの方策を講じる必要があると考えられる。学生が英作文などで翻訳サイトを大部分で利用したことが明らかな時には、その提出物は評価対象にしないなどの強い措置でのぞむこともやむを得ないだろう。しかし、それ以前にまず学生自身に翻訳サイトに頼ってもメリットがないことに気づかせ、安易に頼らないという意識を持たせることが大事だと思われる。学生はそれほど深い考えも持たずに、便利なツールということでつい利用している場合が多いからである。そのような考えのもとに、授業内である試みを行なってみたので、それについてここで紹介したい。

このアクティビティは、特に初級レベルから中級の下位レベルまでの学生を対象に考えてみたものである。というのも、中級レベル以上の学生の場合は、先の検証結果などから、翻訳サイトの英文の良し悪しをある程度判断しながら利用していることがわかったからである。そのレベルの学生であれば、検証結果を直に示して、翻訳サイトを使った箇所ではいかに引きずられて不自然な英文になる場合が多いかを指摘するだけでも、十分な防止効果になることが期待できよう。しかし、初級レベルの学生の場合には、翻訳サイトが完璧ではないと漠然とは認識しつつも、その誤りの程度について深く気がついていくわけではなく、図らずもかなりの程度依存してしまっているという構図が明らかに見られた。そこで、意識改革を促すのに、もっと根本的な対処法が必要だと思われたのである。

アクティビティについて詳述すると、まず主な目的は、翻訳サイトの翻訳能力の不完全さについて、学生自らに検証、実感させることで安易な利用を防ぐことにあった。実施時期は2002年7月であり、対象者は、本学国際学部の初級レベル～中級レベルと思われる、CALL受講の1年生2クラスとEIC (English for International Communication) 受講の2年生1クラスの合計53人であった。

次に方法であるが、2枚のワークシートを用いて行なった。まず、以下のようなワークシート1を使い、翻訳サイトにかけるために選んだ10の日本語の短文(添付資料参照)それぞれについて①に自分の力で英作文をさせた。全員その作業が終了した後、②にペアごとに相談して、よりよい英文ができた場合にはそれを書くように指示し、最後にクラス全体で議論して、教師が③モデル訳を提示するようにした。このように実際に翻訳サイトを使う前に学生に自力で英文を考える時間を与えたのは、後述するように、事前に頭の中で日本語の文をどのように英文に転換するかを考えさせて、学生に和文と英文の基本構造の相違について意識を向けさせるねらいからであった。特に英語力の低い学生の場合には、翻訳サイトで出力された英文の良し悪しを瞬時に判断するのは難しいと思われたので、準備作業を行なう必要もあった。たとえば、ワークシート1の(1)は、和文では主語が省略されていても、英訳するときには主語を補う必要があることを改めて意識させるためのものである。

〈ワークシート1〉

(1)正月は初詣に行く。

- ①自分の訳： \_\_\_\_\_  
②ペア訳： \_\_\_\_\_  
③モデル訳： \_\_\_\_\_

(2)~(10)についても同様の作業。例文は全て添付資料と同じ。

その後、ワークシート2を使って、実際にコンピュータの翻訳サイトにアクセスさせるアクティビティを行なった。すでに自分で翻訳することを試みた10の日本語の文を一つ一つ①翻訳サイトに入力させ、②出てきた文が正しいか間違っているかを判定させた。③間違っていると思った場合にはその箇所を訂正させ、④そのような誤訳が出てきた原因を考えて記述させた。さらに、⑤和文入力を工夫して再度入力を試み、⑥出てきた英文を再検討させた。1年次に全員CALL授業経験がある2年生EICクラスについては、今回は普通教室での授業だったため、①②を記入済みのワークシートを配布し、③④⑤についてのみ作業させた。

ここに、学生がワークシート2に書いた中で典型的だった一例を示して、学生の回答傾向を概説したい。

〈ワークシート2〉(6)の回答例

- ① 和文：私は甘いものに目がない。  
② 翻訳サイト：I have a passion sweetly. → 判定×  
③ 訂正：I like sweet foods.  
④ 原因：「目がない」という日本語特有の慣用句を使っている。  
⑤ 入力案：私は甘いものが大好きだ。  
⑥ 翻訳サイト：I love sweet the one. → 判定○

②のように、翻訳サイトでは、日本語の発想そのままを入力すると誤った英文に翻訳される場合が多いが、ほとんどの学生がこれについては正しくない文だと判定できており、③の訂正についてもワークシート1のアクティビティが頭に残っていた学生は文ごと正しく直すことができていた。④の原因の指摘については、この例のように明らかなものについてはできていたが、問題文によっては見当違いであったり、無回答も目立った。⑤の入力案は、どの文の場合も比較的よく考えられていたが、⑥に関しては、入力を工夫してもなお正しい英文が出てこないことに気づいて首をかしげる学生がいる一方、入力さえ正しくすれば正しく翻訳されると過信している学生も少なくなかった。特にこの例のようにはっきりと間違っているものでも、見慣れない構文の場合には正しいと判定する傾向が目立ち、やはり学生たちが翻訳サイトの誤翻訳を根本的に見抜けていないことがここでも証明される形となった。このような事例について、時間をかけて逐一解説を行なった結果、今回初めて翻訳サイトの翻訳能力の不完全さを認識した学生も多いようだった。

授業後に、この一連のアクティビティの効果のほどを確認するために、53人全員に記述式のアンケートを実施した。その結果、「翻訳サイトの翻訳能力をどの程度信用できると思いましたか。」「翻訳サイトについてのアクティビティを行なった感想を何でも自由に書いてください。」の2問に対する回



答から集約された意見は以下のものであった。翻訳サイトについて否定的な感想が合計すると76%にのぼったのに対して、肯定的な感想は9%にとどまった。

表8 翻訳サイトとそれを使ったアクティビティについての感想

翻訳サイトは意外とあてにならない	16人	(31%)
入力を考え、間違いを探さなくてはいけないので逆に大変	11人	(21%)
頼りすぎでは自分の力にならない/自分でやるのが一番	8人	(15%)
自分の実力を上げないといけないと思った	5人	(9%)
楽しかった/少しは便利だと思った	5人	(9%)
その他/無回答	8人	(15%)

さらに「これからも翻訳サイトを使おうと思いますか。」という質問については、この学生たちの場合はアクティビティ前は「はい」と「いいえ」がちょうど50%ずつだったが、アクティビティ後はそれぞれ36%と64%に変化していた。上記の結果と合わせて、このアクティビティは「安易に翻訳サイトを利用しない」という意識を植え付けるのに有効だったと考えてよいだろう。

ただ、翻訳サイトに関して肯定的な感想は9%と少なかったのに、このアクティビティ後もまだ36%が「これからも使う」と答えたところに、一筋縄ではいかないこの問題解決の難しさがあると言える。使うと回答した学生にはその理由も記述させたのだが、「自分だけでは力不足だから」、「自信がないから、参考程度に」、「(自分の力よりは)少しだけ信用できるから」など自分の英語力の不足をあげる例が目立った。英語力の低い学生たちは、翻訳サイトはあてにならないと思いながらも、自分の力不足をカバーする手段としてつい頼りにしてしまうというジレンマに陥っているようである。安易な翻訳サイトの利用に歯止めをかける一方で、こういった大学生たちにいかに基礎英語力をつけさせるかを考えることが、この問題から明らかになってきた私たち英語教師のもう一つの課題であろう。そして、そのことがひいては一番の翻訳サイト依存防止特効薬となり得るのと言うまでもない。

## 5. 翻訳サイトを使ったアクティビティの副次的効果

上記の翻訳サイトを使ったアクティビティには、翻訳サイトの翻訳能力の不完全さを学生に認識させて、その安易な使用を防止するという目的の他にも、日本語と英語の構造の違いを学生に改めて認識させるというねらいがあった。最近、翻訳サイトを使わなくても、初級レベルのクラスの中では、平気でのIの代りにitを使ったり、日本語を片端から横に倒していくような英文を書く学生も目立つ。このような、自らも同じような間違いをする学生が、翻訳サイトの英文の誤りを見抜けないのも当然と言える。上述のアクティビティを行なうことにより、日本語と英語の違いに対する基本的な理解を欠いている学生に、日本語から英語への変換をそのまま試みた場合、どれほど本来の英語とかけはなれたものになるかということの一つ一つ具体例から学ばせることもできるのではないかと考えたのである。山内(2001)が述べている機械翻訳の誤訳の逆活用である。アクティビティ後のアンケートで、この副次的ともいえる効果についても確認するために「日本語と英語の文の構造の違いについて、初めて気がついた点や再認識した点を書いてください。」という項目を設けたところ、「英語には主語が必要」、「文の作り方、順序が全然違う」、「日本語は言いたいことが最後、英語は逆だと思った」、「日本語をそのまま英語にするのは無理だと思った」というような感想が多数見られた。

この結果は、おそらく演繹的にルールから教えこまれるような英文法を苦手としてきた学生に、このように帰納的に文法を教えることの重要性を示していると思われる。そして、上記のアクティビティが、その意味で一つの有効な授業例であることが確認されたと言えよう。

## 6. おわりに

昨今の爆発的なコンピュータ、そしてインターネットの普及に伴い、情報の受発信のためにますます英語の必要性が痛感されるようになってきた。そうした状況の中で、日本の知的風土と言語的孤立ともあいまって、テクノロジーとしての機械翻訳への関心が個人レベルでもかなり高くなってきている(成田, 1996)。一口に機械翻訳といっても、CD-ROM型のソフトからインターネット上で利用できるいわゆる「翻訳サイト」、それもウェブの翻訳からメール、チャット翻訳にいたるまでさまざまなタイプがあり(高田, 2001)、値段もソフトなら数十万するものから無料の翻訳サイトまで幅広い。これだけ種類がある以上、玉石混濁なのは当然だし、これからますますテクノロジー化していく流れの中で、機械翻訳すべてを否定するような提言をするつもりはない。

ただ、筆者らが問題だと感じているのは、その品質に疑問があるインターネット上の無料翻訳サイトを、学生たちが実に安易に英語学習に利用しているように見える点である。英日翻訳に関しては、今回その実力を検証していないので言及することは避けるが、少なくとも日英翻訳に関しては、利用することの弊害はかなり大きいと考えられる。利用の仕方について、メーカーによっては、「短文にする」、「まわりくどい表現を避ける」、「主語や目的語を省略しない」(富士通 ATLAS)など、日本語入力時のポイントをアドバイスしているところもあるが、筆者らの検証では、そのアドバイスに従っても必ずしも正しい英文を得られないことが多かった。それほど、誤翻訳が多い翻訳サイトなのだが、その認識が十分ではない上に、日本語と英語の構造の違いを深く認識せずに入力して、翻訳された文章が正しいか間違っているかについても判断できないまま利用している学生が少なくない。早急に何らかの対処法を講じる必要があるのではないかと感じ、今回のこの問題提起と当面の対処法としてのアクティビティ紹介に至った次第である。

現在、「はじめに」でも触れたように、翻訳サイトはまだ開発段階であり、特に日英機械翻訳に関しては、その実力は実用レベルからは程遠いようだ。市販されている翻訳ソフトでも、助詞の用法の複雑さや文脈情報の欠如など日本語の言語的特徴からその文脈処理機能はおもちゃレベルだ(成田, 1996)という。こうした有料の翻訳ソフト等についても、筆者らは近いうちに検証を進めてみるつもりであるが、大きな期待が集まっている以上、高性能で廉価なソフトが供給されるようになる日は意外と近いかもしれない。ただそういう時代が来ても、その翻訳結果がニュアンスも含めて自分の言いたいことと合致しているかどうかを見極めるのは本人であって、使いこなすにはある程度の英語力が必要であるのは自明のことと言える。学習者が自分で英語力を高める努力を放棄しては、せっかくのテクノロジーの恩恵にも預かれないということを認識させることも、情報化時代の英語教師の大事な役割の一つであろう。

(付記) 本稿は、筆者らが2002年9月に第41回 JACET (大学英語教育学会) 全国大会において口頭発表した内容に加筆修正したものである。

## 参考文献

- Swain, M. & Lapkin S. (1995) Problems in output and the cognitive processes they generate: A step towards second language learning. *Applied Linguistics*, 16 (3), 371-391.
- 高田大介 (2001) 「翻訳サイトで海外デビュー」『INTERNET magazine』4月号, 242-247.
- 成田一 (1997) 『パソコン翻訳の世界』講談社新書1378.
- 成田一 (2000) 「日英・英日機械翻訳の実力」『言語処理学会第6回年次大会発表論文集』, 51-54.
- 町田隆哉他 (2001) 『新しい世代の英語教育—第3世代のCALLと「総合的な学習の時間」』 松柏社.
- 見上晃 (2002) 「英語教育改革の積極度に見る二重性」『データに基づく大学外国語教育の実態と今後』, 第41回 JACET 全国大会シンポジウム配布資料.
- 山内豊 (2001) 『IT時代のマルチメディア英語授業入門』研究社.
- 横山晶一 (2001) 「インターネット翻訳による情報受信」『慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』, No.51, 11-17.

## 参考ウェブサイト

富士通 ATLAS <http://software.fujitsu.com/jp/atlas/point-je.html>

## 添付資料

### 無料翻訳サイトの訳例

#### ▶和文の主語が省略されている場合

- (1) 正月は初詣に行く。(人間の代わりに it が主語になる例/同じ語句が繰り返される例)  
It goes to the New Year's visit to a shrine at the New Year.
- (2) 雨の日はたいてい家にいる。(本来主語でないものが主語になる例)  
The day of rain is usually in the house.
- (3) 毎日、新聞を読む。(不自然な受身になる例)  
The newspaper is read every day.

#### ▶和文の目的語が省略されている場合

- (4) 私の父はタバコを吸うが、弟は吸わない。(関係ない動詞が使われる例)  
Younger brother does not breathe in though my father smokes the cigarette.

#### ▶和文の述語が省略されている場合

- (5) 私は野球、弟はサッカーが好きだ。(主語と補語が不一致の例)  
I am favorite baseball and younger brother likes soccer.

#### ▶日本語的表現の場合

- (6) 私は甘いものに目がない。(関係ない単語が使われる例)  
I have a passion sweetly.

▶和文が重文で、節と節の関係が不明瞭な場合

- (7) 雨が降って、試合が中止になった。(時制の不一致が生じる例)

It rains and has canceled the game.

- (8) 昨日、私は宇多田ヒカルをみかけたが、元気そうだった。(文のつながりがおかしい例／動詞のあとに不用な前置詞が入る例)

I seemed to was energetic yesterday though I saw to Utadahical.

▶和文が複文の場合

- (9) 次のバスは何時か知っていますか？(本来主語でないものが主語になる例)

Does the next bus know some time?

- (10) 神戸は私がいつか訪れたいを思っている都市です。(文のつながりがおかしい例)

Kobe is a city has when I want to visit some time.

(大須賀直子・真野千佳子：本学国際学部非常勤講師)